

小倉百人一首

競技かるた読手テキスト

〔抜粋〕

一般社団法人全日本かるた協会
競技かるた部（読唱）

【はじめに】

平成十四年三月に『競技かるたの読み方』が発刊されて十八年が経過した。このたび大幅にテキストの内容を改訂し、新たに『競技かるた読手テキスト』として発刊することとした。

これまでテキストとして用いてきた『競技かるたの読み方』は、昭和五十九年に第一回の読手講習会を開催して以来、読手講習会の指導内容を基に、参加者の皆さんのご意見・ご希望を聞きながらまとめたものであり、競技かるたの読みの普及に大きな役割を果たしてきた。

しかし、読みの普及が進み、公認読手の人数も年々増加する中において、テキスト内容を吟味する必要が生じ、新たなテキストを発刊するに至った。

今回、『競技かるた読手テキスト』で改訂した点は、大きく次の3点である。

- (1) 「読唱の基本パターン」を「5・3・1・6方式」に変更した。
 - (2) 伸ばし箇所について変更を加えた。(四句目の途中にすべて伸ばしを入れる、二句目の途中に伸ばしを入れていた「たえ
てしなくば」「つねにもがもな」の伸ばしを不要とする、等)
 - (3) 読手として知っておくべき内容(品詞分解・関連規程・調音点・調音法等)を追加した。
- 読手の皆さんには、新テキストを熟読の上、読みの向上に努めていただきたい。なお、改訂内容の周知期間を一年間とし、その間は新旧どちらの読みも可とする。令和三年四月一日から新テキストの内容を実施する。
- 読手を志す者は、車の両輪のように、読み・取りの勉強をし、競技者が安心して競技に臨めるよう努めてほしい。

令和二年四月

一般社団法人全日本かるた協会 競技かるた部(読唱)

【読手心得】

1 読手の基本

- (1) 読手は公正さが第一である。
競技者から信頼されるよう言葉・服装・態度に留意する。
- (2) 歌を正しく読むこと。
学説的にどちらとも読める歌があるが、一般社団法人全日本かるた協会競技かるた部（読唱）制定の規準による。
- (3) 歌を読む速度・余韻・間合いは次を標準とする。
■下の句5秒程度 ■余韻3・0秒 ■間合い1・0秒 ■上の句6秒程度

2 競技会心得

- (1) 競技前に読札が百枚揃っていることを確認する。
- (2) 読札はよく切って読唱箱に入れる。読唱箱を使わないときは裏返しにして積み重ねる。読み終わった札は表にする。
- (3) 競技開始時に競技者が読手に向かって礼をするとき、合わせて一礼をする
- (4) 会場全体に目を配り、競技者の準備状況を確認してから下の句を読み始める。
- (5) 競技中は読みに専念し、定位置で姿勢を正しくし、視線は正面を見て読む。（上の句は札を見て読む）
- (6) 最後の競技者の勝敗が宣言されたら、その下の句を読み切って終了し一礼をする。

【読唱上の決まり】

競技かるたの読み方は、文法を重視しながらも、競技者の取りやすいタイミングをはかるため、独特の読み方をする。

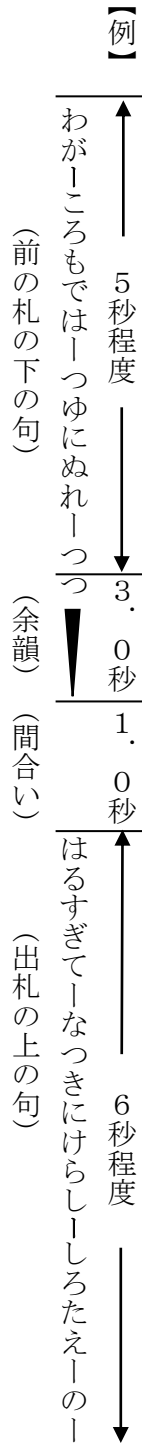
1 読唱の基本パターンは「5・3・1・6方式」である。

■下の句5秒程度

■余韻3.0秒

■間合い1.0秒

■上の句6秒程度



2 初句の五字は切らないで読む。(一字をおよそ0.2秒の速さで読む)

3 大山札は二句目までを一気に読む。(ただし二句目の単語の切れ目でわずかに伸ばしを入れてもよい) 【全六首】

※大山札Ⅱ「朝ぼらけ」「わたの原」「君がため」

・朝ぼらけ有明の月とく(朝ぼらけ有明の1月とく)

・わたの原八十島かけてく(わたの原八十島かけてく)

・君がため春の野に出でてく(君がため春の1野に出でてく)

・朝ぼらけ宇治の川霧く(朝ぼらけ宇治の1川霧く)

・わたの原漕ぎ出でてみればく(わたの原漕ぎ出でてみればく)

・君がため惜しからざりしく(君がため惜しから1ざりしく)

4 上の句の終わりは最後の一字の前で少し伸ばして読む。ただし、語の切れ目や読みやすさといった観点を考慮し、例外的に次の(1)(2)を設定する。

(1) 二字前を伸ばすもの【全三首】

・わが庵は……しかぞくすむ
 ・世の中は……なきさく漕ぐ
 ・世の中よ……思ひく入る

(2) 一字前で伸ばしても二字前で伸ばしてもどちらでもよいもの【全二十二首】

・秋風に……たえ間くより
 ・天の原……春日くなる
 ・有明の……別れくより
 ・難波江の……ひとよくゆゑ
 ・嘆けとて……思はくする
 ・おほけなく……おほふくかな
 ・わびぬれば……難波くなる
 ・高砂の……咲きにくけり
 ・このたびは……手向く山
 ・恋すてふ……立ちにくけり
 ・みかきもり……夜はくもえ
 ・みかの原……いづみく川
 ・山里は……まさりくける
 ・夜をこめて……はかるくとも
 ・風をいたみ……おのれくのみ
 ・かくとだに……さしもく草
 ・契りきな……しぼりくつつ
 ・ちはやぶる……竜田く川
 ・君がため春……若菜くつむ
 ・君がため惜し……命くさへ
 ・つくばねの……みなく川
 ・由良のとを……かぢをくたえ

5 下の句の終わりは、競技者のタイミングに合わせるため、文法に関係なく最後の二字の前を少し伸ばして読む。(ただし「もがな」「思へ」「思ふ」「なくに」「ものを」は三字でまとめる【全十一首】)

・あらざらむ……もがな
 ・なにしおはば……もがな
 ・長からむ……思へ
 ・忘れじの……もがな
 ・わびぬれば……思ふ
 ・誰をかも……なくに
 ・みかきもり……思へ
 ・みちのくの……なくに
 ・いまはただ……もがな
 ・憂かりける……ものを
 ・瀬をはやみ……思ふ

【競技かるたの読み方一覽】

『序 歌』

難波津に―咲くやこの花―冬―ごも―り―

今を―春べと―咲くやこの―花―

『あ』の部

78 淡路島―かよふ千鳥の―鳴く声―に―

幾夜―ねざめぬ―須磨の関―守―

45 あはれとも―いふべき人は―思ほえ―で―

身の―いたづらに―なりぬべき―かな―

69 あらし吹く―二室の山―もみぢ葉―は―

竜田の―川の―錦なり―けり―

56 あらざらむ―この世のほかの―思ひ出―に―

今―ひとたびの―あふこと―もがな―

1 秋の田の―かりほの庵の―苫をあら―み―

わが―衣手は―露にぬれ―つつ―

79 秋風に―たなびく雲の―たえ間―より―

もれ出づる―月の―影のさや―けさ―

12 天つ風―雲のかよひ路―吹きとぢ―よ―

をとめの―姿―しばしとど―めむ―

7 天の原―ふりさけ見れば―春日―なる―

三笠の―山に―出でし月―かも―

30 有明ありあけのーつれなく見えしー別わかれーよりー

58 ありま山やまーみないの笹原ささはらー風吹かぜふけーばー

31 朝あさぼらけけ有明ありあけの月つきとー見みるまでーにー

64 朝あさぼらけけうじの川霧かわぎりー絶たえ絶だえーにー

39 浅茅生あさじ(う)のー小野おのの篠原しのはらーしのぶれーどー

3 あしびぎのー山鳥やまどりの尾おのーしだり尾おのー

43 あひみてのー後のちの心こころにーくらぶれーばー

52 明あけぬればー暮くるるものとはー知しりながーらー

『な』の部

25 なにしおはわばー逢坂山おーさかやまのーさねかづーらー

19 難波なにわがた濁みじかー短あしきあし芦あしのーふしの間まーもー

88 難波江なにわえのー芦あしのかりねのーひとよーゆえー

あかつきーばかりー憂うきものはーなし

いでそよー人ひとをー忘わすれやはーする

吉野よしののー里さとにー降ふれる白しらー雪ゆき

あらはれーわたるー瀬せ々のあじーろ木ぎ

あまりてーなどかー人ひとの恋こいーしき

ながながしー夜よをーひとりかもー寝ねむ

昔むかしはー物ものをー思おもはざりーけり

なほー恨うらめしきー朝あさぼらけーかな

人ひとにー知しられでーくるよしーもがな

逢あわはでーこの世よをー過すぐしてよーとや

みをーつくしてやー恋こいひわたるーべき

36 夏の夜は―まだ宵ながら明けぬる―を―

53 嘆きつつ―ひとりぬる夜の―明くるま―は―

86 嘆けとて―月やは物を―思は―する―

80 長からむ―心もしらず―黒髪―の―

84 ながらへば―またこのごろや―しのばれ―む―

『お』の部

60 大江山―いく野の道の―遠けれ―ば―

95 おほけなく―うき世の民に―おほふ―かな―

44 逢ふことの―たえてしなくば―なかなか―に―

5 奥山に―もみぢふみわけ―鳴く鹿―の―

82 思ひわび―さても命は―あるもの―を―

72 音にきく―たかしの浜の―あだ波―は―

雲の―いづくに―月宿る―らむ―

いかに―久しき―ものとかは―しる―

かこち顔―なる―わが涙―かな―

みだれて―今朝は―物をこそ―思へ―

憂しと―見し世ぞ―今は恋―しき―

まだ―ふみも見ず―天の橋―立―

わが―立つ所に―墨染の―袖―

人をも―身をも―恨みざら―まし―

声―聞くとときぞ―秋は悲―しき―

憂きに―たへぬは―涙なり―けり―

かけじや―袖の―ぬれもこそ―すれ―

26 小倉山おぐらやま―峰みねのもみぢ葉じば―心こころあら―ば―

いまひとたびの―みゆき待また―なむ

『わ』の部

8 わが庵いおわは―都みやこのたつみ―しかぞ―すむ―

世よを―うぢ山じやまと―人ひとはいふ―なり

92 わが袖そでわは―潮干しおひにみえぬ―沖おきの石いし―の―

人ひとこそ―しらね―かわくまも―なし

38 忘わすらるる―身みをば思おもはず―ちかひて―し―

人ひとの―命いのちの―惜おしくもある―かな

54 忘わすれじの―ゆくすままでは―かたけれ―ば―

けふを―かぎりの―いのちと―もがな

20 わびぬれば―いまはたおなじ難波なにわ―なる―

みをつくしても―あはむとぞ―思おもふ

11 わたの原はら八十島やそしまかけて―漕こぎ出いでぬ―と―

人ひとには―告つげよ―あまのつり―舟ぶね

76 わたのはらはらこぎいでて―みれば―

雲くもゐに―まがふ―沖おきつ白しら―波なみ

『た』の部

73 高砂たかさごの―尾上おのえの桜さくら―咲さきに―けり―

外山とやまの―霞かすみ―たたずもあら―なむ

4 田子たごの浦うらに―うち出いでて見みれば―白妙しろたえ―の―

富士ふじの―高嶺たかねに―雪ゆきはふり―つつ

16 たち別れ―いなばの山の―峰に生ふる―

89 玉のをよ―たえなばたえね―ながらへ―ば―

55 滝の音は―たえて久しく―なりぬれ―ど―

34 誰をかも―知る人にせむ―高砂―の―

『二』の部

29 心あてに―折らばや折らむ―初霜―の―

68 心にも―あらでうき世に―ながらへ―ば―

10 これやこの―行くも帰るも―別れて―は―

24 このたびは―ぬさもとりあへず―手向―山―

97 来ぬ人を―まつほの浦の―夕なぎ―に―

41 恋すてふ―わが名はまだき―立ちに―けり―

まつとし―聞かば―いま帰り―こむ

忍ぶる―ことの―弱りもぞ―する

名こそ―流れて―なほ聞こえ―けれ

松も―昔の―友なら―なくに

おき―まどはせる―白菊の―花

恋しかる―べき―夜半の月―かな

知るも―知らぬも―逢坂の―関

もみぢの―にしき―神のまに―まに

焼くや―もしほの―身も―がれ―つつ

人―しれずこそ―思ひそめ―しか

『み』の部

49 みかきもり―衛士えじのたく火ひの―夜よは―もえ―

昼ひるは―消きえつつ―物ものをこそ―思おもへ―

27 みかの原はら―わきて流ながるる―いづみ―川がわ―

いつ見みき―とてか―恋こいしかる―らむ―

14 みちのくの―しのぶもちずり―誰たれゆるゑ―に―

乱みだれそめ―にし―われなら―なくに―

94 み吉野よしのの―山やまの秋風あきかぜ―さ夜よふけ―て―

ふるさと―寒さむく―衣ころもうつ―なり―

90 見みせばやな―雄島おじまのあまの―袖そでだに―も―

ぬれにぞ―ぬれし―色いろはかは―らず―

『は』の部

96 花はなさそふ―嵐あらしの庭にわの―雪ゆきなら―で―

ふりゆく―ものは―わが身みなり―けり―

9 花はなの色いろは―うつりにけりないたづら―に―

わが身み―よにふる―ながめせし―まに―

2 春過はるすぎて―夏来なつきにけらし―白妙しろたえ―の―

衣ころも―ほすてふ―天あまの香具かぐ―山やま―

67 春はるの夜よの―ゆめばかりなる―手枕たまくら―に―

かひなく―たたむ―名なこそをし―けれ―

『や』の部

32 やまがわ 山川に―風かぜのかけたる―しがらみ―はわ―

28 やまざとわ 山里は―冬ふゆぞさびしき―まさり―ける―

59 やすらはわで―寝ねなましものを―夜よふけ―て―

47 やえむぐら 八重葎―しげれる宿やどの―さびしき―に―

『よ』の部

93 よ なかわ 世の中は―つねにもがもな―なきき―漕こぐ―

83 よ なか 世の中よ―道みちこそなけれ―思おもひ―入いる―

85 よ ものおもー 夜もすがら―物思ものおもふころは―明あけやら―で―

62 よ おむ 夜をこめて―鳥とりのそらねは―はかる―とも―

なが 流れも―あへぬ―もみぢなり―けり

ひと 人めも―草くさも―かれぬと思おも―へば

かたぶく―までの―月つきをみし―かな

ひと 人こそ―見みえね―秋あきは来きに―けり

おぶね あまの―小舟の―綱手つなでかな―しも

やま 山の―奥おくにも―鹿しかぞ鳴なく―なる

ねや 閨ねやの―ひまさへ―つれなかり―けり

おさか よに―逢坂おさかの―関せきはゆる―さじ

『か』の部

98 かぜ 風そよぐ―ならのおがわ小川の―夕ゆぐれ―はわ―

なつ みそぎぞ―夏なつの―しるしなり―ける

48 風をいたみー岩うつ波のーおのれーのみー

51 かくとだにーえやはいぶきのよさしもー草ー

6 かささぎのー渡せる橋にーおく霜ーのー

『い』の部

21 いま来むとーいひしばかりにー長月ーのー

63 いまはただー思ひ絶えなむとーばかりーをー

61 いにしへのー奈良の都のー八重ざくーらー

『ち』の部

75 契りおきしーさせもが露をーいのちにーてー

42 契りきなーかたみに袖をーしぼりーつつー

17 ちはやぶるー神代もきかずー竜田ー川ー

くだけてー物をー思ふころーかな

さしもーしらじなーもゆる思ーひを

白きをー見ればー夜ぞふけにーける

ありあけのー月をー待ち出でつるーかな

人づてーならでー言ふよしーもがな

けふー九重にーにほひぬるーかな

あはれー今年のー秋もいぬーめり

末のー松山ー波こさじーとは

からーくれなゐにー水くくるーとは

『ひ』の部

35 人はいさー心こころもしらずーふるさとーはわー

99 人もをしー人ひともうらめしーあぢきじなーくー

33 ひさかたのー光ひかりのどけきー春はるの日ひーにー

花はなぞー昔むかしのー香かににほほひいーける

世よをおもー思おもふゆえににー物もの思おもふみ身みはわ

しづず心こころーなくー花はなの散ちるーらむ

『き』の部

15 君きみがためはる春はるの野のに出いでてー若菜わかーつむー

50 君きみがためお惜おしからざりしー命いのちーさえへー

91 きりぎりすー鳴なくや霜しも夜よのーさむしろーにー

わがー衣手ころもにー雪ゆきは降わりーつつ

長ながくーもがなとー思おもひけるーかな

衣ころもーかたしきーひとりかもー寝ねむ

『う』の部

74 憂うかりけるー人ひとを初はつ瀬せのー山やまおろーしー

65 恨うらみわびーほさぬ袖そでだにーあるものーをー

はげしかれーとはわー祈いのらぬーものを

恋こいにー朽くちなむー名なこそお惜おしーけれ

『つ』の部

23 月見れば―ちぢに物こそ―悲しけ―れ―

わが身―ひとつの―秋にはあら―ねど

13 つくばねの―峰よりおつる―みなの一川―

こひぞ―つもりて―淵となり―ぬる

『し』の部

40 しのぶれど―色に出でにけり―わが恋―は―

物や―思ふと―人のとふ―まで

37 白露に―風の吹きしく―秋の野―は―

つらぬき―とめぬ―玉ぞ散り―ける

『も』の部

100 ももしきや―古き軒端の―しのぶに―も―

なほ―あまりある―昔なり―けり

66 もろともに―あはれと思へ―山ざく―ら―

花より―ほかに―しる人も―なし

『ゆ』の部

71 夕されば―門田の稲葉―おとづれ―て―

芦の―まろやに―秋風ぞ―吹く

46 由良のとを―わたる舟人―かぢを―たえ―

ゆくへも―しらぬ―恋の道―かな

『む・す・め・ふ・さ・ほ・せ』の部

87 村雨むらさめの―露つゆもまだ干ぬ―まきの葉は―に―

霧きり―たちのぼる―秋あきの夕ゆ―ぐれ

18 すみの江えの―岸きしに寄る波なみ―よるさへ―や―

夢ゆめの―かよひ路いじ―人目ひとめ避く―らむ

57 めぐりあひて―見みしやそれとも―わかぬま―に―

雲くもがくれ―にし―夜半よわの月つき―かな

22 吹ふくからに―秋あきの草木くさきの―しをるれ―ば―

むべ―山風やまかぜを―嵐あらしといふ―らむ

70 さびしさに―宿やどをたち出いでて―ながむれ―ば―

いづずこも―おなじ―秋あきの夕ゆ―ぐれ

81 ほととぎす―鳴なきつる方かたを―ながむれ―ば―

ただ―ありあけの―月つきぞ残のこ―れる

77 瀬せをはやみ―岩いわにせかるる―滝川たきがわ―の―

われても―末すえに―あはむとぞ―思おもふ